

世の中が変わる時は自分も変わるチャンス 自分の気持ちに忠実に生きよう

中島博司 並木中等教育学校(茨城県立)校長

なかじま・ひろし●1959年滋賀県生まれ。10歳で茨城県に転居し、県内の公立小中高、筑波大学で学ぶ。23歳で茨城県の社会科教諭となって以降、23年間、3校で3年担任および進路指導部を多く担当。4年間の県教委勤務ののち、2校で教頭、1校で校長を務め、2016年より現職。日本史に関する書籍、教科書を多数執筆し、Z会出版『はじめる日本史』はベストセラーに。2015年にアクティブ・ラーニングと出会い、校内外で普及啓発に務めている。

好きなことに一生懸命
取り組める教師の醍醐味

4月に、私は教員としての最終年度を迎えます。教師を目指していた高校2年生のころ、専門教科に迷う私に「中島くんは何が好きなの?」と聞いてくれた先生がいました。得意な教科より歴史を選んだその時からずっと、好きなことに一生懸命取り組んでくることができました。これは、教師という仕事の幸福な一面です。

教師であれば皆、教えるのが好きで、授業をより良くしたいという気持ちをもっていますよね。私も、キャリアの初期からいろんな挑戦をしてきました。初任校では、学生時代に出会った梅棹忠夫の『知的生産の技術』に倣い、「カードシステム学習法」を考案しましたが、生徒が使いこなすには難しすぎる方法となってしまう、失敗でした(笑)。

板書計画を作って授業をしても、私
が板書をしている間は生徒の頭が動い

ていないことに気付き、ノートに貼れる
独自プリントを作ったこともありま
す。理解すること、自分のものにする

ことが大事だと思っていたので、作った
のは穴埋めプリントではなく資料集で
す。さらに発展させた『スーパージ
ブノート』と題した教材も、印刷製本
して生徒に配りました。当時の私のラ
イバルは予備校のスーパージブ講師たち。
受験指導が得意で、何度も高3の担
任をしました。

一生懸命やっているとそれを見てくれ
ている人がいて、次のステップが拓けま
す。先輩教員から「実践をちゃんと
発信したほうが良い」と言われて、
『スーパージブ日本史ノート』を使った授業
を公開したことがきっかけとなり、書
籍の執筆をするようになりました。
今の時代は、発信ツールが充実してい
ます。論文でも、SNSでも校内の
通信でも、なんでもよいので発信する
ことを先生方には勧めています。そ
うすればあなたの良いところを認めて
くれる人が、必ず現れるはずですよ。

教師であることは
学び続けること

教師としての可能性を広げ、キャリ
アを形成していくためには実践を磨く
こと、そのためのインプットも必要で
す。本校の先生方には、学校という
狭い枠を飛び出そう、積極的にセミ
ナー等に参加しよう、と声をかけてい
ます。教科に関するものだけでなく、
趣味やビジネス、なんでも構いません。

私の場合は、日本史の教員として臨
場感をもつて伝えるためにと史跡や博
物館に通い、旅行が趣味になりました。
登山部の顧問になったことから登
山にも打ち込みましたし、プラモデル
製作やパソコンゲームにハマったこと
もあります。それらすべてがどこかで生
かせるのが教師という仕事です。

本校で提唱しているAAL(アート・
アクティブラーニング)も、マジンガーズ
からエヴァンゲリオンまでのアニメや、
プラモデル作りから学んだことが生き
ています。AALは、人工知能の発達

する時代において、左脳の知識重
視の教育だけでなく、アートやデザイ
ンを通してクリエイティブティや感性
を育てることが大切との発想から。
本校の先生方は、漢詩を絵で表現す
る授業など意欲的に取り組んでくれ
ています。

ずいぶんと好きなことばかりやって
きたと思われるかもしれませんが、ど
んなことであれ学ぶことをやめるのは
教師としてありえません。なにかに
夢中になって学ぶアクティブラーナーが、
次のアクティブラーナーを育てるのだ
と私は信じています。今は変化の時
代ですが、世の中が変わる時は自分
も変わるチャンスです。みんなが試行
錯誤する時代だから、人と違うこと
をやっても大丈夫。誰もが願う「より
良く、もっと、幸せに」という自分の
気持ちに忠実に生きませんか。

私自身も発展途上です。もしも一
度、教壇に立つことができたら、
思いっきりアクティブな日本史の授業
をしたい、そう思っています。